

世のあらゆるエッチな女性のお尻が自分の元に寄ってくる

禁断の箱を開けてしまった
童貞少年の話

○学生のイザンとはある日曜の朝、友人たちと一緒に近くの広い公園の一角でサッカーをして遊んだ帰り、フェンスの外側に不思議な木箱があるのを見つけた。

誰かの落とし物だろうかと家に持ち帰り、部屋で中を開けてみると・・・。

プロプロワァァン・・・・・・・・

白い煙が立ち込め、そして煙は桃のような大きな肌色の物体に変わったのではないか！

イザンは眼前に突如現れたその物体に驚いて、遠ざけようと手を押し出してみたが透き通っていて触れない。

すると、目も鼻も口もないのに、その物体はイザンに話しかけてきた。

「あなたは“女尻の箱”を開けてしまいました」

「えっ！??お・・・女尻！！??」

その物体があまりにイザンの目の前にありすぎて把握が難しかったが、そう言われてみればそれは“大きなお尻”に見えなくもなかった。

言葉は続いた。

「これは禁断の箱です」

そして得体の知れないその大きなお尻は、イザンが仰天するような言葉を・・・。

「この箱を開けてしまったあなたには・・・・・・・・」

世の女性たちのお尻の穴が近寄ってくる

「えっ！！??」

1 時間後。

“嘘だよそんなこと！そんな不思議なことあるはずがないよ！！”

イザンは、その不思議なお尻が最後に発した“決定的な言葉に心の中で首を振っていた。

「嘘に決まってるや！！」

しかし・・・その言葉は紛れもなく真実であった。

イザンは自宅の外へ出た。

昼間に近づいていたが、相変わらず太陽が照りつける爽やかな日和だ。

「んっ！！はぁっ！！んっ！！はぁっ！！」

道の向こうからやってきたのは、いつも日曜の午前になると近くをジョギングしている女子大生のハルカさん。

調子良さそうに元気に走ってくる。

彼女は夏になるとノースリーブを着て短パンを穿いていて、揺れる巨乳はいつもすれ違う少年たちの下半身を通常状態にしておくことを困

難にしていた。

ちなみにイザンは、彼女が陸上クラブに入っているらしいことを聞いていた。

「イザンくん！！おはよお！！」

元気よくハルカさんからイザンに話しかけてきた。

いつ出会っても明るい彼女。

イザンが挨拶をするのもよくあることである。

「あっ！おはようございますっ！！」

イザンが答えると・・・。

「あのねイザンくん？あたし走ってたらさ、腰のところが痒くて何かなってるみたいなんだけど手で確認しても分かんないの。背中だから見れないし、イザンくんちょっと見てくれない？」

そう言ってハルカさんは、薄茶色の短パンと白いレディースタンクトップの境目部分の肌を、イザンに背中を向けて突き出すように見せてきた。

体験版はここまでです